瑞二だより

３学期始業式より（１月８日）

皆さん、あけましておめでとうございます。

令和８年が始まりました。長いようで、振り返ってみるとあっという間だった冬休みですが、皆さんはどのように過ごしましたか。有意義な時間を過ごせたでしょうか。ぜひ、どんな冬休みだったのか、機会があれば校長先生にも教えてください。

私の冬休みは、特別どこかへ出かけたわけでもなく、自宅の前にある神社に初詣に行ったくらいでした。年末年始は、テレビでもいわゆる「特番」と呼ばれる番組が多く放送されます。何時間にもわたる番組も多く、特に正月は、お笑い芸人さんたちがたくさん出演する番組が目につきます。

昔、皆さんが生まれる前、20年、30年前は、今のようにインターネットや動画配信サービスが今ほど普及していませんでした。その頃、正月の楽しみといえば、家族でテレビを見ることが大きな楽しみの一つでした。私も幼い頃から正月番組を見ていました。そこでは多くの漫才師が、見事な話術で人々を楽しませていました。

ところが最近は、正月の特番では漫才を披露していても、普段のテレビ番組では純粋な漫才をあまり見かけなくなったように感じます。漫才で売れて全国に名前が知られるようになった人たちも、時間が経つと、バラエティー番組のひな壇の一員になったり、食べ物や旅のレポーターを務めたりする姿が多くなります。漫才そのものをテレビで披露する機会は、昔より少なくなっているのかもしれません。漫才を見たければ、演芸場に行くしかないようです。

漫才は、日本独特の文化です。基本は2人組で、ボケとツッコミに分かれ、話を膨らませながら笑いを生み出します。ボケが面白いことを言い、それに対してツッコミが鋭く突っ込む。そのやり取りを重ねることで、話が深まり、笑いが生まれます。この漫才には「ネタ」の呼ばれる観客を笑わせるための台本、話の筋があります。元々は「種タネ」の逆さ言葉で、芸能界の隠語が一般化したものです。このネタを考えることが、実はとても大変なのです。

同じネタを何度も繰り返せば、見ている人はすぐに飽きてしまいます。だから漫才師は、常に新しいネタを作り続けなければなりません。どうやってネタを作るのかというと、人によってやり方はさまざまです。部屋にこもって時間をかけて考える人もいれば、日常生活の中で気づいたことをメモに残す人もいます。

街で見た出来事、誰かとの会話、ちょっとした違和感。そうしたものをノートやスマートフォンに書きためていく。これが、いわゆる「ネタ帳」です。頭の中やノート、スマートフォンの中に、たくさんの材料をためておく。その中からネタを作り上げていくのです。漫才師にとってのネタ帳は、舞台の上で話を広げ、人を笑わせるための大切な土台になっています。実は、こうした「ためておくこと」「蓄えておくこと」は、漫才師だけに必要なことではありません。

皆さんも、いずれ社会に出ていきます。いずれは全員が社会人になります。そのとき、何を考え、どう判断し、どんな言葉で人と関わるかが、とても大切になってきます。そのときに大切になるものが二つあります。

一つ目は、コミュニケーション能力です。これは、皆さんが学校生活の中で、プレゼンテーションなどを通して少しずつ身につけてきている力です。すぐに自分の考えを言葉にできなくても構いません。頭の中で考え、人と関わろうとすることが大切なのです。

二つ目は、自分の中に「考えるための素材」や「判断のもとになる引き出し」つまり先に話した「ネタ」をたくさんもっていることです。知識だけでなく、物事の見方、考え方、感じ方といった心の中の蓄えです。人は、何かを決断したり、困難に直面したりしたとき、頭の中にある引き出しを開けて考えます。その引き出しが多ければ多いほど、よりよい判断ができるようになります。無数の引き出しの中には、たくさんのネタが出番を待っているのです。

では、皆さんがたくさんのネタを作るにはどうすればよいか。その答えの一つが、本を読むことです。本は、自分が経験していない世界や人生を、疑似体験させてくれます。他人の考え方や生き方に触れることで、自分の中に新しい視点が生まれます。

皆さんも、普段朝読書をしていますね。あの時間は、とても貴重な時間です。今から7年前の3学期始業式の場で、私は「1年間で100冊の本を読む」と全校生徒の前で宣言しました。結果的に、その年は110冊の本を読みました。

当時、私が多く読んでいたのは「自己啓発本」と呼ばれる本です。自己啓発本というのは、勉強の本でも小説でもなく、「人はどう生きるとよいのか」「困ったときにどう考えればよいのか」「仕事や人間関係でつまずいたとき、どんな視点を持てばよいのか」といったことを、分かりやすく示してくれる本のことです。難しい理論ではなく、経験や実例をもとに書かれているものが多く、今の自分に必要だと感じたテーマの本を手に取って読んでいました。

学校の図書館には、そのような本ではなく、皆さんが読みたくなるような本がたくさん置いてあります。以前、今から1年半前、朝礼で私が皆さんに紹介した本『プロジェクト・ヘイル・メアリー』は、図書館の分類でいうと「外国小説933番」の棚にあります。「校長先生の推薦書」という形で、以前は図書館の中で紹介されていましたが、図書委員の皆さんがポップを作ってくれたことで、多くの生徒が手に取ってくれました。この作品は予告通り映画化され、アメリカ、日本で3月20日から公開されます。とても楽しみです。

私はすでに、この映画の予告映像があることを知っていますが、あえて見ていません。本を読んでいるときに、自分の頭の中で描いた宇宙の風景や登場人物の姿、緊張感のある場面を大切にしたいからです。本を読むということは、ただ文字を追うことではなく、自分自身が監督になり、俳優になり、映画を作っているようなものです。その自分だけの映像と、映画館で見る映像がどう違うのか。それを比べるのも、読書の大きな楽しみだと思っています。

ぜひ皆さんも、今年は今まで以上に本と出会ってください。本は、皆さんの中にたくさんの引き出しを作ってくれます。

その引き出しは、必ず将来、皆さんの力になります。これで私の話を終わります。

保護者の皆様へ

新年明けましておめでとうございます。令和８年が幕を開けました。日頃より本校の教育活動へのご理解とご協力に、心より感謝申し上げます。

冬休み中、大きな事故等なく生徒たちが元気に登校したことに安堵しております。今月中旬からはいよいよ千葉県の推薦入試が始まり、受験シーズン本番です。保護者の皆様、受験生を特別扱いせず、ぜひ「いつも通りの生活」を継続させてください。「体調管理」を理由とした入試前の欠席は控え、最後まで規律正しく登校し、仲間と切磋琢磨できるようご協力をお願いいたします。本年も宜しくお願いします。

校長　滝澤清豪

発　行
江戸川区立
瑞江第二中学校
校長 滝澤 清豪
発行日1月9日
東京都江戸川区
瑞江4-54-1